

加藤 謙一（かとう・けんいち）

1、プロフィール

児童雑誌編集に憧れて大日本雄弁会講談社に入り、「少年倶楽部」の編集に従事、吉川英治、佐藤紅緑らを起用して読者を増やし、大衆児童文学の隆盛に尽くした。

<生没>

1896(明治 29)年5月 28 日 ~ 1975(昭和 50)年6月 30 日

<代表作>

『少年倶楽部時代—編集長の回想—』

<青森との関わり>

弘前市に生まれ、県立弘前中学、青森県師範学校卒業。三省小学校、富田小学校で数年間教鞭をとった。

2、作家解説

第二大成小学校を経て明治 42 年県立弘前中学校に入学、大正元年 12 月発行の「校友会誌」第 15 号より編集部員として活躍、他に部員として一戸謙三、鳴海完造らがいた。また、「鉄雪社」という結社に属し、5年の時には機関紙「大和の桜」の編集長を務めるなど、この時からすでに編集の才を現わしていた。

弘前中学校卒業後、中津軽郡藤代村(現弘前市)三省小学校に一年間務め、青森県師範学校二部に入学。大正6年3月卒業後は中津軽郡清水村(現弘前市)富田小学校に勤務した。1年間勤務した後大正7年「こどもの雑誌は教育者が作るべきである」と児童雑誌編集の思いを抱いて上京、3年間小学校に勤務した後、大正 10 年講談社入社、「少年倶楽部」の第5代目編集長となり念願がかなう。

以後野間清治社長の編集方針に則り、「おもしろくてためになる」雑誌作りに精を出すようになり、大正 14 年5月号から 44 回連載した吉川英治作「神州天馬侠」や、昭和2年3月号から1年余連載した大仏次郎の「角兵衛獅子」、同年5月号か

ら連載の佐藤紅緑「あゝ玉杯に花うけて」等の作品により、45万部に売り上げ部数をのばし、「少年倶楽部」の黄金時代を築いた。この読者数の増加は挿絵画家の人気に負うところも大きく、斎藤五百枝、伊藤彦造らの挿絵は読者の熱狂を呼んだ。また、別冊付録を付ける等のアイデアも功を奏したのであった。昭和6年の新年号からは「のらくろ」が登場、16年の10月号まで11年間続いた。佐藤紅緑が「少年倶楽部」のために「陽気に元気に生き生きと」と書いたが、「のらくろ」はまさにこの標語を地でいくものであった。昭和7年まで編集長として大衆児童文学の興隆に寄与、11年より「講談社の絵本」の編集をし、絵本史にも大きな足跡を残した。

3、資料紹介

○『少年倶楽部時代－編集長の回想－』

図書

1968(昭和43)年9月28日

195mm×130mm

著者が憧れの講談社に入社し、「少年倶楽部」の編集を任せられて、いかにして読者の心をつかむ雑誌作りをしていったかを、後年回想して書いたもので、第1部「少年倶楽部時代」第2部「思い出す人々」からなる。